

ランピースキン病 (LSD) -病態と発生状況-

- ランピースキン病は、牛の皮膚に病変等が生じる疾病。牛乳の生産等に一時的な影響はあるが、致死性は低く、ほとんどの牛では徐々に回復（家畜伝染病予防法上「届出伝染病」の扱い）。人には感染せず、畜産物も食用上安全。
- 昨年11月6日、福岡県の乳用牛農場で、我が国初の感染を確認。令和7年3月21日時点で、福岡県で19事例、熊本県で3事例発生を確認。

ランピースキン病とは

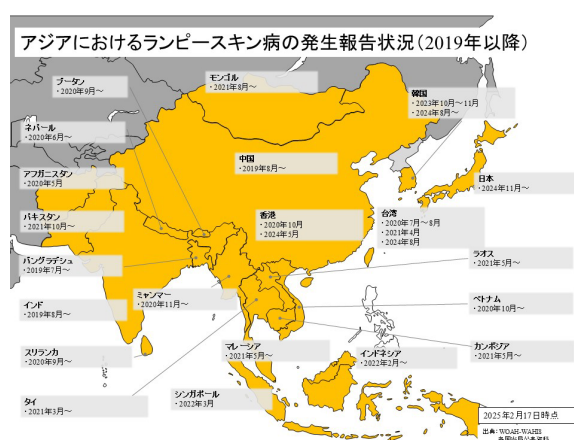


写真提供：モンゴル国中央獣医学研究所
(State Central Veterinary Laboratory in Mongolia)

皮膚病変

- 皮膚の結節や泌乳量の減少等の症状を呈する、牛・水牛の病気。
- 主に蚊等の吸血昆虫（ベクター）による機械的伝播により感染が拡大。
- ほとんどの牛は感染しても徐々に回復。
- 家畜伝染病予防法上「届出伝染病」。
- 人には感染せず、畜産物も食用上安全。

海外の発生状況



- アフリカで流行
- 2010年代、中東の一部、トルコ、南ヨーロッパにおいて発生
- 2019年以降、アジアでの発生拡大
- 2023年及び2024年、韓国で発生

〔韓国での発生を受け、ワクチン備蓄※や防疫対策要領の制定により、我が国への侵入に備えていた。〕

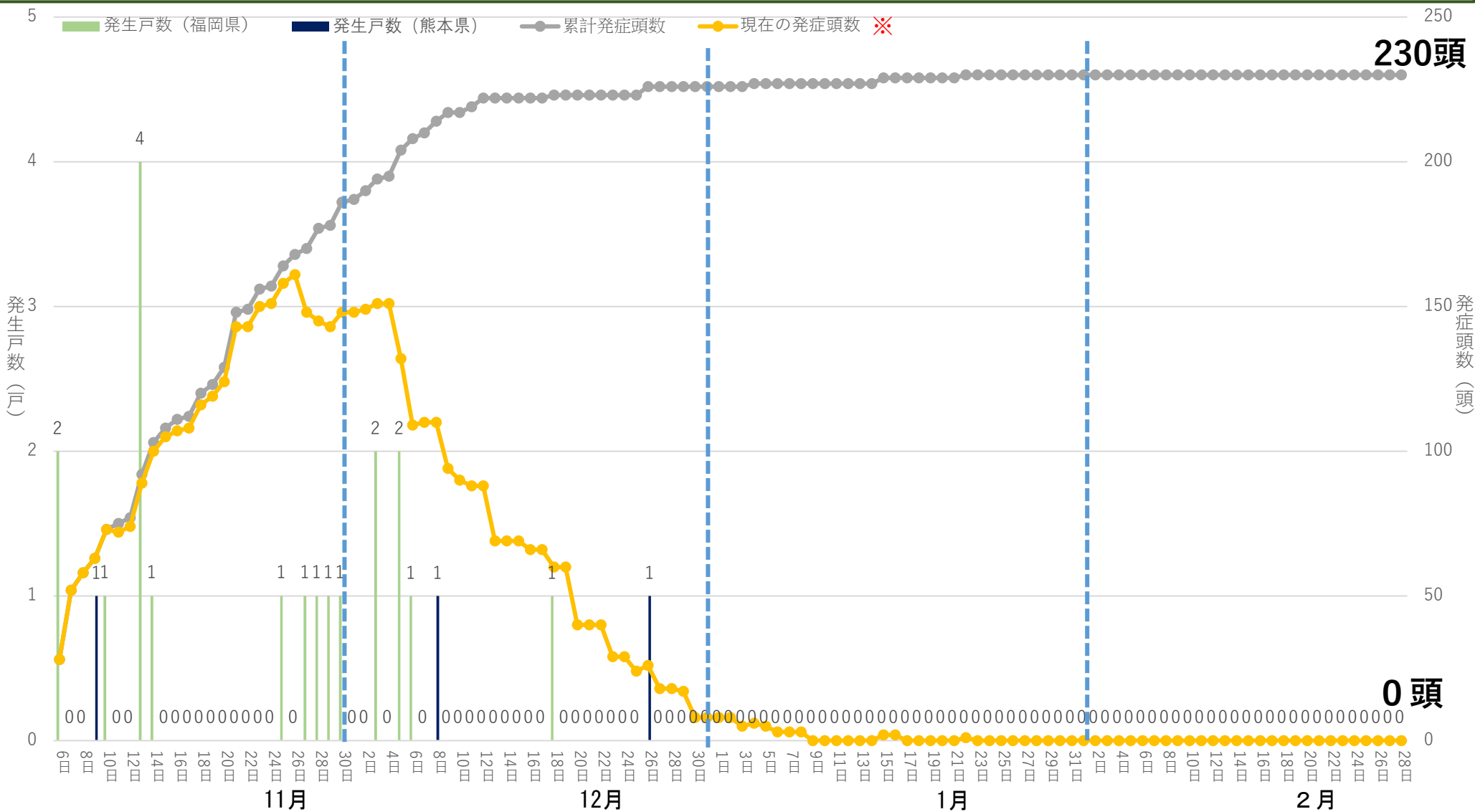
※日本中央競馬会畜産振興事業により日本動物用医薬品協会が実施

国内の発生状況

- 昨年11月6日：福岡県内の2農場で初めて発生を確認
→初発農場の周辺で発生確認したところ、複数の農場で発生を確認（合計19例）
- 発生農場から移動牛の追跡調査では、熊本県で1例確認。
→昨年12月8日、26日に1例目農場周辺で新たに発生確認（合計3例）

国内でのランピースキン病発生経過

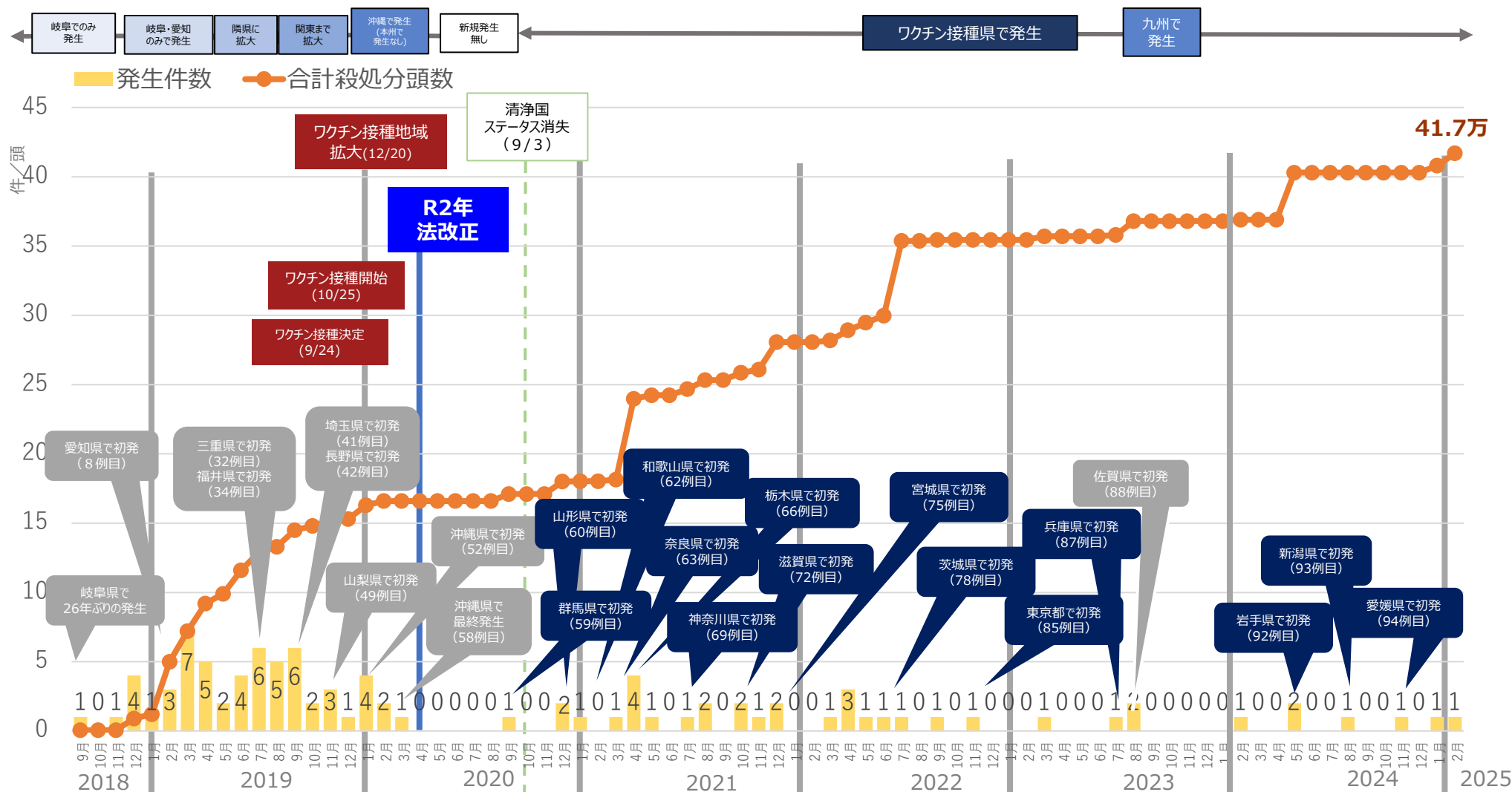
- 令和6年**11月6日**、**福岡県**の2農場で、**国内初となるランピースキン病の発生**。
- 令和7年3月21日現在、福岡県19例、熊本県3例の計22例の発生を確認。疑症牛を含めて、国内では累計230頭の発症を確認。**自主淘汰等を進め、現在の発症頭数は0頭**。



※自主淘汰数、解除検査陰性頭数を差し引いた頭数

豚熱発生経過

- 2018年9月9日の岐阜県での発生以来、**23都県で計96事例**発生し、これまでに**約41.7万頭を殺処分**。
- **2019年9月24日にワクチン接種を決定**、10月15日に防疫指針を改訂、同年**10月25日からワクチン接種開始**。接種後、発生は散発的となるも、ワクチン接種県における発生も見られる状況。



国内の飼養豚・野生イノシシでの豚熱発生

- 予防的ワクチン接種対象地域は、防疫指針に基づき、以下を考慮し、牛豚等疾病小委員会で議論した上で設定。
- ① 野生イノシシにおける豚熱感染状況
 - ② 農場周辺の環境要因（野生イノシシの生息状況、周辺農場数、豚等の飼育密度、山、河川の有無等の地理的状況）
 - ③ 疫学的リスク低減のため、まだら打ちを避ける（面的に接種し順に拡大）

飼養豚陽性発生県：赤色
【23都県】（飼養頭数 3,457,230頭(全国の39.3%)）
野生イノシシ陽性発生県：赤色(沖縄を除く) 橙色
【39都府県】（飼養頭数 4,777,460頭(全国の54.3%)）
飼養豚へのワクチン接種推奨地域：赤色 橙色 黄色
【46都府県】（飼養頭数 8,045,460頭(全国の91.4%)）
※飼養頭数は、R6畜産統計・確報値を基に計算

